

カラー版

カパンジー機能解剖学が できるまで



医歯薬出版株式会社



はじめに

表紙のダイバーがどなただかわかりますか？

わかりませんよね、フランスの整形外科医で、機能解剖学・生理学に関する世界的なロングセラーである“Anatomie fonctionelle（日本語版『カパンジー機能解剖学』）”の著者カパンジー先生です。昔の写真ではありません、つい最近の写真です。

2005年，“Anatomie fonctionelle”第Ⅰ巻はフランスで約20年ぶりに改訂され、原著第6版としてオールカラーで登場いたしました。その後、第Ⅲ巻は2007年3月に、第Ⅱ巻は2009年10月に出版されました。日本語版は、「第Ⅰ巻 上肢」が2006年5月に、「第Ⅲ巻 脊椎・体幹・頭部」が2008年1月に、「第Ⅱ巻 下肢」が2010年4月に発行され、全3巻がオールカラーで完結いたしました。今回は、あまり表面にはでないカパンジー先生のエピソードや、訳者である塩田悦仁先生とカパンジー先生との交流などについてご紹介したいと思います。いままでとは違った視点から『カパンジー機能解剖学』をご覧いただければ幸いです。



出版までの経緯

「カパンジー先生から著書を翻訳するように言われたのですが、どうしたらよいのでしょうか？」と小社に電話があったのは2005年6月のことでした。電話をかけてこられたのは福岡大学筑紫病院整形外科の塩田悦仁先生でした。塩田先生が話される内容は編集部にとって寝耳に水のことでしたが、詳細をうかがってみますと「“Anatomie fonctionelle”第Ⅰ巻が約20年ぶりに改訂（原著第6版）され、オールカラーになってフランスで発行された。当初、カパンジー先生は、原著第5版の日本語版の監訳者である荻島秀男先生に翻訳の打診をしたが、亡くなれていることを知って、旧知の仲である塩田先生に翻訳を依頼してこられた」という経緯がわかってきました。後日、カパンジー先生から塩田先生にあてた翻訳依頼の文章も拝見させていただきました。原著第5版の訳者は荻島先生以外にもいらっしゃるのですが、今回はカパンジー先生からの直接のご指名ということであり、塩田先生に翻訳をお願いすることになりました。原著第5版では、フランス語版を英訳した書籍から日本語版に翻訳したのですが、塩田先生はフランス留学の経験もあり、フランス語にご堪能なので、今回はフランス語版から直接、翻訳することになりました。そのおかげで、英語版で割愛されていたため、前回の日本語版にも掲載されていなかった『切り離して組み立てる機械的模型』も初めて反映させることができました。

こうして、世界10か国語に翻訳されている“Anatomie fonctionelle”の日本語版翻訳作業が開始されることになりました。



世界のトップをきって日本語版を発行

約20年ぶりに改訂された原著第6版は、塩田先生の手によってフランス語から日本語に翻訳されることになりました。塩田先生は、その年の夏休みや休日を返上して翻訳作業に没頭されたそうです。そのように精力的に進められたのは、同年11月にフランスで開催されるフランス整形災害外科学会までに訳出を終了させ、同学会で渡仏した折にカパンジー先生にお会いして疑問点を解決したいという思いがあったからだそうです。そしてその思いはみごとにはたされました。

最近では、インターネットを利用したメールが発達していろいろな確認がしやすくなり、この翻訳作業にも大きな力を発揮することになりました。塩田先生が疑問点や質問をメールで問い合わせると、カパンジー先生からはすぐに返事の届くことが多く、翻訳作業がとてもスムーズに進んだということです。

こうして、オールカラーになった日本語版が上梓されたのは2006年5月のことでした。塩田先生より電話をいただいてから約1年がたっておりまして、翻訳書としては英語版などより早く、世界のトップをきっての発行となりました。これも、塩田先生の精力的な翻訳作業をはじめ、福岡大学筑紫病院整形外科医局員の方々のご尽力やインターネットの発達に負うところが非常に大きいと思います。



カパンジー先生と絵画

ここで、塩田先生からうかがった話をもとにしてカパンジー先生のことをご紹介しますと思います。

カパンジー先生のお名前の表記は“Adalbert Ibrahim Kapandji”となります。“Adalbert”は母方の祖父（フランス人）の名前から、“Ibrahim”は父方の祖父（トルコ人）の名前から付けられました¹⁾。そして、父親は外科医、母親は画家、母方の祖父は機械設計士であったそうです。カパンジー先生は整形外科医として医療に携わるかたわら、『カパンジー機能解剖学』を執筆されているのですが、本文だけでなく、すべての絵やイラストをご自身で描き、ご自身で色づけされています。ご両親の職業を考えれば「なるほど」と納得できます。

カパンジー先生の絵画に対する造詣の深さはさりげなく同書に示されています。たとえば、日本語版（以下、とくに断らない場合はすべて日本語版）第Ⅰ巻に図5-112（247頁）が掲載されています。これは、Georges de La Tour（ジョルジュ・ドゥ・ラ・トゥール：1593～1652）1625年ごろの作「乞食の喧嘩」に描かれている、盲目の老婆のリウマチ手に特有な尺側偏位を呈している手に構想を得たシェーマです。リウマチ手を描いた最古の



図 5-112

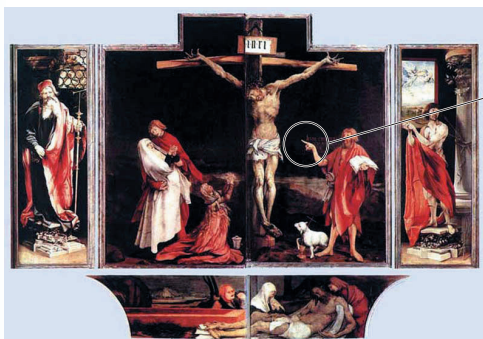
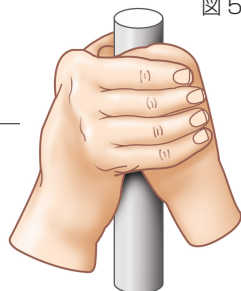
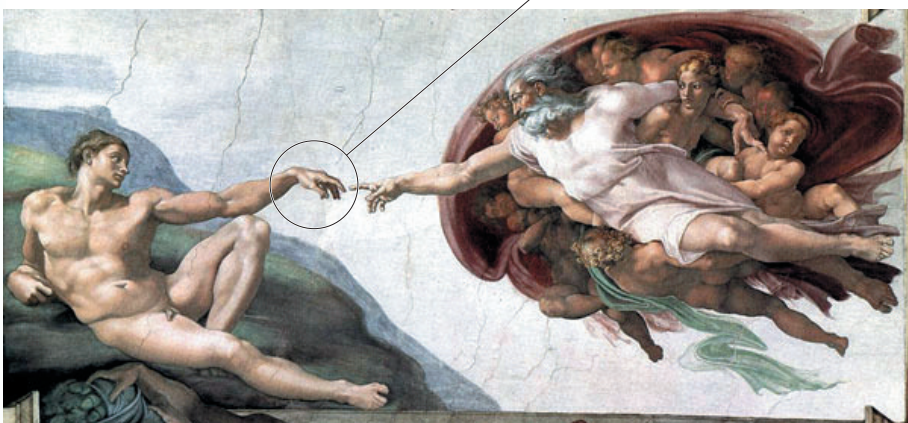


図 5-290



図 5-292



絵画といわれるルーベンス作“The Holy Family with St. Anne”より古いといわれています。同様に、図 5-290 (327 頁) はマティアス・グリュネヴァルト作「イーゼンハイム祭壇画」から、図 5-292 (329 頁) はミケランジェロ作「天地創造」から構想を得たシェーマです。日本語版では、カパンジー先生の許可を得て、構想のもととなった絵画を掲載させていただきました (350 頁)。これは原著にもない、おそらく日本語版のみの頁です。第Ⅲ巻でも同様に掲載させていただきました (322 頁) が、第Ⅲ巻では、もととなった絵画・彫刻が、すべてパリにあるルーブル美術館とロダン美術館に所蔵されているものでしたので、塩田先生は渡仏の折、カパンジー先生に勧められて駆け足でそれらを鑑賞されたそうです。その成果は、美術館内での掲示場所の詳細な記述にあります (322 頁)。大きな美術館では、目的の作品にたどり着くのがけっこうむずかしいようです。パリでそれらの作品を鑑賞する機会がございましたらぜひ参考になさってください。



カパンジー先生とフランス語、ダイビング

カパンジー先生は第Ⅰ巻のなかで次のように述べられています。「古い用語で現在はあまり用いられない la poigne (握力) という言葉は、この種の把持を表現するには好都合で、英語の grasp より価値があり好ましい」(316 頁)。これについて塩田先生は「最近、フランスでも英語の医学用語を多用する傾向にあるが、仏語には元来、“poignet (手関節)” と関連した “la poigne (握力)” という用語があるので、これを使用すべきであるという著者の主張」と訳注で解説されています。「フランス人はフランス語にプライドをもっており、他語のできる人であっても国内ではフランス語でしか話さないものだ」という噂話を聞かされてきたなかではとても新鮮で興味深い話題でした。それにしても、訳注がなけれ



300 回を超えるダイビングでカパンジー先生は初めてマンタに出会いました。

ば、さらっと読み飛ばしてしまうかもしれません。このようにフランスやヨーロッパの香りがたがう話題は随所に発見することができます。

同じく第Ⅰ巻 236 頁には、ナポリの“jettatore”という動作についての訳注があり、「イタリアのナポリ地方に特有の動作で、示指と小指のみを伸展させた拳をつくる。この動作には人を非難する悪い意味がある」と塩田先生が解説されています。ヨーロッパではだれでも知っている常識だそうです²⁾が、訳注がないと理解できませんね。

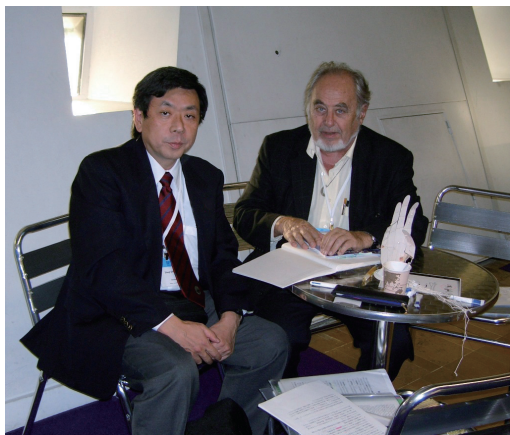
カパンジー先生は幅広い趣味をおもちですが、ダイビングもその1つです。いまでも年に数回は南の島を訪れ、ダイビングを楽しまれているようです(表紙の写真, 前頁の写真)。

第Ⅰ巻が発行間近になり、「日本語版への序文」のお原稿を、塩田先生からカパンジー先生に督促していただいたところ、バカンス中のモルディブから「南十字星」と「モルディブ島」という2編の詩が送信されてきました。塩田先生からその詩を転送していただいたときには、第Ⅰ巻の発行のことなどしばし忘れて美しい南の島に思いを寄せたものです。書籍だけでなくカパンジー先生ご自身からもフランスの香りがあふれ出ておりますね。



カパンジー先生と塩田先生との交流

塩田先生は1985～1987年にかけてフランスに留学され、そのときにカパンジー先生と知り合われたそうですから、すでに20年以上のお付き合いということになります。その後、学会で渡仏するたびにお会いしている(下の写真)そうで、2001年秋に渡仏してカパンジー



2005年秋のフランス整形災害外科学会場でカパンジー先生(右)と打ち合わせをする塩田先生。テーブル上の手の模型は日本からつくっていったもの

先生のご自宅を訪問した際には、このたびの改訂版のシェーマ1つ1つにパソコンで色づけされている様子を間近でご覧になっていたそうです。もっともそのときには、まさかご自身で翻訳することになるとは夢にも思わなかったそうです²⁾。



全3巻の完結

原著第6版第Ⅱ巻は2009年10月にフランスで発行され、ここに全3巻の改訂が完結しました。その際に、原著のタイトルが“Physiologie Articulare”から“Anatomie fonctionnelle-Physiologie de L'appareil locomoteur”に変更されましたので、日本語版の書名も『関節の生理学』から『機能解剖学』に変更すると同時に、これまで英語読みであった“カパンディ”をフランス語の発音に近い“カパンジー”に変更いたしました。カパンジー先生が今回の改訂作業に着手されたのは2001年秋のことですから、実に8年がかりで完成したことになります³⁾。原著第6版第Ⅱ巻の発行とともに塩田先生には訳出作業を精力的に進めていただきまして、2010年4月に日本語版第Ⅱ巻が発行されました。ここに日本語版も『カラー版カパンジー機能解剖学』全3巻が完結いたしました。

フランス語の原著から直接に訳出された日本語版を、機能解剖学、運動器の生理学の書としてご愛読いただくのは当然のこととして、カパンジー先生の手になるカラーシェーマの美しさや、カパンジー先生の全身から発散されるフランスの香り、カパンジー先生の多才な横顔(数学、物理学、建築学、天文学、発生学、哲学、絵画、音楽など多岐わたる分野に造詣が深い)もお楽しみいただけると思います。

多彩な表情をもつ『カラー版カパンジー機能解剖学』全3巻を十分にご活用されることを願っております。

参考文献

- 1) A.IKAPANDJI 著, 塩田悦仁訳: 訳者の序文, カラー版カパンジー機能解剖学Ⅰ上肢. 医歯薬出版, 2006, ix.
- 2) 塩田 悦仁: 「カパンディ関節の生理学」の翻訳に携わって. 九州大学整形外科学教室同窓会誌, 10-13, 2007.
- 3) A.IKAPANDJI 著, 塩田悦仁訳: 訳者の序文, カラー版カパンジー機能解剖学Ⅲ下肢. 医歯薬出版, 2010, ix.

この小冊子は, “三橋真次: 『カパンディ関節の生理学』日本語版発行にまつわるエピソード. Professionalism in Physiotherapy, 2: pp.1～3, 2008 をもとにまとめたものです。

(2010.03.25)